歴史的町並み保全地区に対する市民の「認識－反応」過程に関する研究

歴史的町並み保全地区における地域アイデンティティの形成に関する基礎的研究

A STUDY ON THE RECOGNITION-RESPONSES PROCESS OF CITIZENS
ABOUT PRESERVATION DISTRICTS FOR GROUPS OF HISTORIC BUILDINGS

A basic study on formation of local identity about preservation districts for groups of historic buildings

鄭 秀 卿*, 根上 彰生**

Sookyong JUNG and Akio NEGAMI

This study analyzed “recognition-response process” of citizen to find the factors of Han-Ok (Korean-Traditional house) Village as local identity that induce Recognition and response from the citizen. The main conclusions are as follows.

1. Recognition of Han-Ok Village, though built in modern times, is enhancing by the preservation policy and there is possibility that the enhanced recognition will improve local identity and response because recognition is positively correlated to response. Therefore, potentiality was confirmed for the growth of “recognition-response process” of the citizen regarding groups of Historic buildings.
2. three differentiated spatial components of its identity were observed in Han Ok Village: facility, traditional landscape and cultural activity. Therefore, both landscape and facility and cultural activity should be considered in planning groups of Historic buildings into a local identity. In addition, a plan should be established focusing on such identity factors as symbolism and originality to induce response from the citizen.

Keywords : Groups of Historic buildings, Local Identity, Citizen, Recognition-Responses, ANCOVA

歴史的町並み, 地域アイデンティティ, 市民, 「認識－反応」, 共分散構造分析

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的

近年、日韓の両国では近代化で失われてきた歴史的な町並みを保全することにより、歴史的な町並みを文化財として保護しながら、歴史的町並みとそれを取り巻く周辺環境を「地域商業の活性化、地域のコミュニティの維持」などの多様な役割を果たす地域のアイデンティティとして形成しようとする取り組みが多くなされている。それにとともに歴史的町並みとそれを取り巻く周辺環境を再生した地区(以下、歴史的町並み保全地区^{注1)})における地域アイデンティティ形成の現況やその評価を分析し、町並み保全への参加や来訪を誘導する方向性を示す研究も多くなされている。福田¹⁾は竹富島伝統的建造物群保存地区(以下、伝建地区)における赤瓦屋根が、その歴史的な価値は低い、観光客に伝統的なものとして受け止められ、赤瓦が町並み保全によりその地区のアイデンティティとして認識されることを確認した。また、足立²⁾は歴史的町並み保全地区の地区内住民にとって歴史的町並みが地域アイデンティティのひとつとして捉えられていることを確認した。このような既往研究の結果から町並み保全政策により歴史的町並みが、歴史的町並みの維持・保全・利用の直接的な主体である地区内住民や観光客に地域アイデンティティとして認識されていることが示された。その上で大島³⁾は奈良井伝建地区の地区内住民が歴史的

的な町並みを地域アイデンティティとして捉える意識が少なからず存在し、住居に対する評価が高いことを示唆し、地域アイデンティティとしての認識が住居満足やまちづくりなどに影響を与える可能性を確認した。また、歴史的な町並みに対して観光客を含めた地域外の人々の意識を検討する必要性を今後の課題として示した。その後に行われた既往研究では、地区内住民だけではなくその周辺の居住者、観光客まで研究の範囲を広げ、歴史的町並み保全地区の地域アイデンティティとして形成される現況を評価する研究が多く行われた。

しかし、歴史的な町並みを地域アイデンティティとして持続的に維持・管理し都市の文化財や場所として位置づけるためには、「地区内住民や地区周辺の住民(以下、住民)」だけではなく、「住民を除く歴史的町並みが位置する行政区域内に居住する全体市民(以下、一般市民)」まで研究の範囲を広げ、一般市民の歴史的町並み保全地区に対する「地域アイデンティティとしての認識(以下、認識)」や「町並み保全の参加、来訪などに関する意思(以下、反応)」を向上させる必要があると考えられるが、まだ歴史的町並み保全地区に対する一般市民の認識に着目した研究は行われていない。

そこで本研究は、歴史的町並み保全地区に対する一般市民の認識の現況および特性に着目し認識による反応の変化(以下、認識効果)を明らかにすることで、歴史的町並み保全地区に対する政策の可能性

* 日本大学大学院理工学研究科 博士後期課程

** 日本大学理工学部建築学科 教授・工博

Doctor Degree, Graduate School of Science and Technology, Nihon Univ.
Prof., Dept. of Architecture, College of Science and Technology, Nihon Univ., Dr. Eng.

を示す。また、その上で一般市民の認識と反応に影響を与える要因を導出し、歴史的町並み保全地区を一般市民に認識を促し反応を誘導することを意図して地区を整備・維持するための知見を提示することを目的として、次のような4段階で研究を進める。

- ① 認識により反応が変化する過程(以下、「認識－反応」過程)に関する理論考察を通じ、空間に対する認識と反応に影響を与える変数および特性を導出し、空間に対する認識と反応の各変数の因果過程を表すモデル(以下、空間に対する「認識－反応」過程モデル)を作成する。
- ② 歴史的町並み保全地区に関する保全政策を考察し、「対象地の変数」と「歴史的町並み保全地区に関する認識現況」の調査項目を作成する。作成したアンケート調査は一般市民を対象に行う。
- ③ 回答者を「歴史的町並み保全地区に対する認識の可否」により2つのグループに分類し、各グループの認識および反応の現況を比較・分析することで、一般市民の認識を強化する必要性や可能性を確認する。
- ④ 「歴史的町並み保全地区を認識しているグループ」の回答のみを分析の対象として「歴史的町並み保全地区に対する「認識－反応」過程」の変数を導出し、各変数の因果過程を分析することで、歴史的町並み保全地区に対する一般市民の認識と認識効果を誘導する歴史的町並みの保全政策に資する知見を示す。

1.2 研究の方法

本研究では歴史的町並み保全地区に対する「認識－反応」過程やその変数を分析することを主な流れにするため、研究の主な方法は因果過程分析が可能な共分散構造分析を採用し、分析には IBM SPSS Amos21 を用いた。また、認識－反応過程の構成要素は既往の理論や研究の考察を通じて導出し、アンケート調査でデータを収集する。得られたデータは IBM SPSS Statics21 を用いて一般統計と因子分析を行い、その現況と因子を導出する。

1.3 本研究の用語

認識(Recognition)は「外界から得た情報・刺激に個人的な意味が付加された記憶⁵⁾であり、道探し、来訪、価値観などの変化に影響を与えることが知られている。本研究ではこのような認識の定義から「空間に対する認識」を「都市空間の中で地域アイデンティティとして意味づけられ記憶されること」として捉える。また、「認識されることにより現れる価値観や行動などの変化」を「認識の効果」に捉えた上でその「価値観や行動などの意思」を「反応」という用語にまとめ、「反応の評価」を「効果の測定基準」とした。

1.4 研究の対象地

本研究は韓国全州市に位置する全州韓屋マウル(韓屋村、表1を参照)を対象に行う。全州市は後述する既往研究⁶⁾⁷⁾により、歴史的町並みの保存政策が地域アイデンティティの形成に影響を与えることが示されており、日韓の事例の中でもその影響が顕著に現れる地域として研究の対象地に選定した。

全州韓屋マウル(以下、韓屋マウル)は1930年代に形成された伝統的な高級住宅である韓屋が広い範囲で分布した地域で、生活様式の変化や都市空間の拡大により1970年代から韓屋の衰退が見られた地域である。衰退した韓屋を保存するために全州市は1970年に建物許可制度を導入し、韓屋が残存する全州市完山区校洞および豊南洞の一带に建物を新築する際にその建物形態を韓屋に制限した。

しかし、「文化財の保護」の概念による当制限はむしろ韓屋の老朽化や新築の減少をもたらし、全州市は1987年から韓屋保存政策を緩和、1997年には一時中止した。このような緩和政策により新築は増加したが、非韓屋の増加や街路景観の変化などが現れ韓屋の町並みが更に衰退するきっかけとなった。

2002年の日・韓ワールドカップの誘致が契機となり全州市は中止された韓屋政策を再び始めた。全州市は韓屋や伝統文化資源を活用することで全州市の伝統文化を広報しながら、都市のアイデンティティの向上と経済の活性化を図るために、「伝統文化特区基本計画および事業計画」⁸⁾を樹立し、韓屋や伝統文化を保全および活用する概念で、「全州韓屋マウル」を本格的に再生し始めた。

この政策により景観の整備、伝統文化施設の建設、伝統行事の実施などが行われ、現在、韓屋マウルは年間500万人以上が訪ねる全州市の名所として、韓屋の保全・活用の先進事例として知られている。

表1 韓屋マウルの概要

区分	内容
位置	韓国全羅北道全州市完山区校洞および豊南洞
面積	252,307m ²

2 空間に対する「認識－反応」過程の変数および特性の導出

「空間に対する「認識－反応」過程」の変数および特性を導出するために「認識」に関する既往理論および研究の考察を行った。

2.1 空間に対する認識の変化過程

1) E.ボールディングのイメージの変化過程

E.ボールディング(Boulding,K.E.)⁹⁾は人が現在、認識しているイメージを「過去から多数のメッセージ(message)を受け入れて形成された知恵で、特別なメッセージにより成長・変化する特性がある」と定義した^{注2)}。その成長・変化はメッセージを受け入れた人が現在のイメージとの相異に気付き、「受け入れる価値がある」と評価する過程を通じて行くと述べ、このような変化は人の価値観または行動にも影響を与える可能性があるとしている。

図1 イメージの変化過程 (E. ボールディングの理論を参照し作成)

つまり、イメージの変化は図1のように「①新しいメッセージに対する差の知覚可否や評価によって、②イメージに変化が表れ、付加的に③人の行動や価値観などが一部変わる」過程により現れる。したがってイメージと反応の変化過程は①新しいメッセージ、②イメージ変化、③人の行動や価値観の変化などの3つの要素で構成されていると言える。

2) 空間に対する「認識－反応」過程

F・ラックマン(Lukermann,F.)¹⁰⁾は「空間のアイデンティティは、自然的・文化的要素の統合であり、各場所は固有なアンサンブル(ensemble)を構え、他の空間と区分される特性がある(1964)」と定義した^{注3)}。また、E・レルフ(Relph,E.)¹¹⁾は「空間に対して人が持つ

イメージをアイデンティティ」という言葉で定義した上で、「空間に文化が含まれ活動が起き、その意味が人にアイデンティティとして認識される時に場所になる(1976)」と述べている^{注4)}。

このような定義を E・ボールディングのイメージ変化過程理論に代入してみると、①空間におけるメッセージは「自然的・文化的要素、固有なアンサンブル」、「文化が含まれている活動」である。その①メッセージを人々が受け入れ、メッセージに価値があると判断されれば②アイデンティティとして認識が変わり、③人の価値観または行動にも影響を与える可能性があると言える。

以上の考察を通じ、空間に対する「認識－反応」過程も独立変数としての①「空間におけるメッセージ」と従属変数としての②「アイデンティティとして認識」や③「行動や価値観の変化」の 3 つの変数が存在することが分かった。また、アイデンティティの認識が変化しても人の価値観または行動などの反応のすべてが変化することはないという特性から、認識と反応に対する価値評価の基準が異なる可能性が分かった。そこで「②アイデンティティとして認識」と「③人の行動や価値観の変化」の間にさらにもうひとつの価値評価を追加し、図 2 のように空間に対する「認識－反応」過程を「認識の価値評価」と「反応の価値評価」の 2 段階に分類した。

図 2 空間に対する「認識－反応」過程

2.2 空間に対する「認識－反応」過程の変数

1) メッセージ

空間形成におけるメッセージを分析した既往研究を表 2 のように考察した結果、既往研究では「空間のメッセージ」を行政的な基準により大きく外観、活動、施設の 3 つの要素に任意的に分類し、研究を行っている。

表 2 空間認識に影響を与える要因

	物理的環境	活動	その他	アイデンティティ
Lynch, K. (1960) ¹³⁾	○			○
Relph, E. (1976)	○	○		○
Steele, F. (1981) ¹⁴⁾	○		社会的環境	心理学的要因
Greene, T.C. (1996) ¹⁵⁾	○		社会的環境	
Lee, N.H. (2011) ¹⁶⁾	○	○	人的環境	
	↓	↓	↓	↓
メッセージの分類	外観	活動	施設	アイデンティティ

しかし、空間のアイデンティティに影響を与えるメッセージは「物理的環境、活動、意味」は組み合わせにより形成され、その組み合わせによりアイデンティティも多様な形態で現れる(E・レルフ^{注5)})。

また、このような特性により「景観や歴史が固有な場所」であっても他の場所と「同じ文化的・象徴的な要素」を共有することで「同じアイデン

ティティに認識」されたり、「建物や景観が同じ」としても「異なるアイデンティティで認識」されたりする(Wagner, P.L. (1972))^{17) 注6)} 特性がある。

つまり、空間に対する認識および反応に影響を与えるメッセージを研究する際に、メッセージの分類は「外観、活動、施設」の行政的、任意な分類ではなく、空間計画として行っているすべての項目をメッセージとして設定した上で、各メッセージに対する実際の評価結果を基準として因子分析を行い分類する必要があると言える。

そこで本研究では韓屋マウルに対するメッセージを調査する際には「既往研究によるメッセージの分類(外観、活動、施設)」を基準として文献調査を行うが、認識と反応に影響を与えるメッセージの分類は韓屋マウルの各メッセージに対する実際の評価結果を因子分析し分類する。この分類を「計画要因」という用語でまとめた。

2) 「アイデンティティとして認識」と「反応」の評価基準

K・リンチ(Lynch, K.)¹³⁾はアイデンティティを「空間に個別化を与えたり、他の場所と差別性を提供したりすることで、空間が独立したひとつの実態として認識されるようにする土台の役割をすること(1960)^{注7)}」と定義した。つまり、アイデンティティは他の場所との相違を評価する基準となり、アイデンティティの評価により地域アイデンティティとしての認識やその反応に対する変化基準になると言える。

そこで本研究は空間に対する認識と反応に影響を与える評価基準を「アイデンティティ」に設定した上で、その調査項目を「空間のアイデンティティを表現する形容詞」として設定した。

2.3 空間に対する「認識－反応」過程の変数と分析モデル

以上の既往理論および研究の考察を通じ、空間に対する「認識－反応」過程の変数およびその特性を次のようにまとめた。

- ① 空間に対する認識と反応の変化過程を考察した結果、「認識－反応」過程は「メッセージ」、「アイデンティティとして認識」、そして「反応」の 3 変数で構成されている。
- ② 「認識－反応」過程は「計画要因」に対する 2 回の価値評価により「計画要因－認識」と「認識－反応」の 2 段階に分ける。また、すべての「計画要因」が空間に対する「認識」と「反応」に影響を与えるわけではない。
- ③ 「メッセージ」の特性を考察した結果、メッセージは行政的・任意な分類することではなく、各メッセージに対する実際の評価結果を用いて因子分析を行い分類する必要がある。因子分析から導出された分類を本研究では「計画要因」という用語とする。
- ④ 「アイデンティティ」が他の空間との差異性を提供するという特性から「アイデンティティとして認識と反応の価値評価」をアイデンティティとする。また、「アイデンティティとして認識と反応の価値評価に対する調査・分析基準」を「アイデンティティを示す形容詞」とする。

図 2 を基に以上の 4 つの特性を加え、各変数の因果過程を表す「空間に対する「認識－反応」過程のモデル」を作成した。(図 3)

図 3 空間に対する「認識－反応」過程モデル

3 調査項目の設定および概要

3.1 アンケートの構成

アンケートは「認識－反応」過程を構成する各変数の現況を評価するために、認識、計画要因、アイデンティティそして反応に分けてその質問項目を作成した。特に韓屋マウルに対する認識の現況を分析するためには、まず全州市に対するすべての場所を導出する必要がある。このように都市全体の空間構造を対象に都市の場所を導出し、その評価を調査・分析する場合、ほとんどの既往研究⁶⁾⁷⁾¹⁸⁾¹⁹⁾では調査を2回に分けて都市の場所を選定した上に、「2回目の回答者は1回目の調査で導出された場所を選定する」という仮定下で研究を行っている。

本研究は韓屋マウルに対する認識と認識効果の関係を明らかにすることをひとつの目的にするため、韓屋マウルに対する認識の可否が研究の重要な基準であり、「韓屋マウルを選定しない一般市民」も研究の対象として含め調査を行う必要がある。そこで既往研究のように2回の調査に分けず、「場所選定」と「韓屋マウルに対する評価」を1つのアンケート調査にまとめ、表3のように構成した。このような構成のために、初ページで、本研究が韓屋マウルに対する研究であることを明示せずに、全州市の場所を選定した後に、次のページで調査の目的や「認識－反応」過程の変数に関する質問項目を分離・構成した。

表3 アンケートの構成

区分	質問
場所の選定 (認識)	1-1 “全州市に引っ越してきた方”に“全州市を簡単に紹介するために市内の空間や建築など”を3つ以上挙げるとしたら、どこを紹介したいですか？
	1-2 貴方が書いて下さった空間、建物などの中で、“重要あるいは必要である”と思うものを3つ選んでください。
アイデンティティ 反応	2-1 韓屋マウルに対するイメージを評価してください
	2-2 韓屋マウルへの愛着や行動意思を評価してください
計画要因	2-3 参加・観覧したい行事や文化が多いと思いますか？
	2-4 参加・利用したい業種や施設が多いと思いますか？
	2-5 貴方が覚えている韓屋マウルのイメージを基に外観や風景に対する貴方のご感想を選択してください
変化	2-6 韓屋マウルが最近、変わったと思いますか？
	2-7 変わったと感じ、来訪回数が増えましたか？
	2-8 変わったと感じ、韓屋マウルへの愛着が増えましたか？

「認識－反応」過程の変数に関する項目は、5点尺度(1:全くそう思わない、2:そう思わない、3:普通、4:そう思う、5:とてもそう思う)を用いて回答者の評価を得た。また、歴史的な町並みの保全による変化が来訪や愛着に与えた影響を分析するために、韓屋マウルの変化認識とその反応の変化に関する項目を追加した。

3.2 各変数に対する評価項目の設定

1) メッセージの評価項目

全州韓屋マウルの計画要因を導出するためにメッセージは「伝統文化特区基本計画および事業計画⁸⁾」、「伝統文化区域地区単位計画補完²⁰⁾」、「全州韓屋マウル造成事業の都市再生成果分析および改選方案²¹⁾」を中心にその政策を考察し、その中で、回答者が参加・観

表4 メッセージの評価項目

区分	メッセージ
活動	祭り、伝統的な行事、現代的な行事、保存活動
施設	休憩施設、記念品販売施設、伝統工芸関連施設、飲食店カフェ、その他の商業施設、娯楽施設、宗教施設、宿泊施設、文化財、文化芸術施設、観光施設
外観	歩行者街路、公園・広場、小さい道、街路施設物、面白い街路施設物、親しい外観、伝統的な様式、歴史的建造物、整備された外観、屋根、看板、高さ制限、目立たない設備、案内表示板、想像物

覧したい「行事・文化などの活動」や「施設」、回答者が覚えている「外観」に対して表4のように30の評価項目を設定した。

2) 韓屋マウルにおけるアイデンティティの評価項目

韓屋マウルにおけるアイデンティティの調査項目は、空間のイメージや場所性の評価を行った既往研究²²⁾²³⁾²⁴⁾の考察を通じ「①きれいな、②代表的な、③歴史的な、④象徴的な、⑤唯一の、⑥固有の、⑦便利な、⑧個性的、⑨親しい、⑩楽しい、⑪活気ある、⑫実用的な」の12の形容詞で設定した。

3) 反応の評価項目

場所への愛着を評価する項目は場所への愛着表現を研究したWilliams&Roggenbuck(1990)²⁵⁾の研究と場所性と愛着の関係を研究したIMら(2013)²³⁾の研究で評価項目として採用した「・愛着を感じる、・変われば懐かしくなる、・満足感を感じる、・物理的な雰囲気に引かれる」という4つの愛着基準を参考し、「・物理的な環境やデザインが好き、・愛着を感じる、・変化なくそのまま保って欲しい、・満足感を感じる、・魅力的な場所だと思う」の5つの項目に修正・構成した。行動意思に関する既往研究²⁴⁾²⁵⁾では「・再来訪したい、・他の人にお勧めしたい」という2つの項目に設定している研究が多いが、本研究は一般市民を対象にするため、「・また訪ねたい、・他の人にお勧めしたい」の2つの項目に「・この場所の発展のために寄付したい、・この場所と関連がある地域活動があれば参加したい、・周辺に住みたい」という3つの項目を追加・構成した。

3.3 アンケート調査の概要

アンケート調査は、全州市に居住する一般市民を対象にして2013年6月8日～7月13日に行った。調査は大学関係者である調査員にアンケートの目的と流れを説明した後、調査員が身近な全州一般市民である周辺協力者にアンケート用紙を配布・回収する方法で行った。なお、本調査においては、全州市の場所選定に関する記述項目や韓屋マウルに関する56個の評価項目で構成されている膨大な調査に協力を得るため、全州一般市民の正確な標本を抽出することは意図せず、まちづくりに関心がある一般市民を主な対象とすることとした。これによる偏りは想定できるものの、一般市民の傾向を捉える上で有効性があるものと判断した。

表5 アンケート調査の概要

調査期間	有効票数
2013年6月8日～7月13日	216票

表6 回答者の年齢別および性別の割合

区分	割合(%)					
年齢別	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
割合	24.5	34.4	23.1	11.1	6.0	0.9
性別	男性			女性		
割合	54.2			45.8		

その結果、総232票が回収され、その中で216票の有効票数(93.1%)を得た。有効票数は216票と少ないが、56個の項目すべてに回答を得た票数であることに意義があると考ええる。また、都市全体空間の中で地域アイデンティティとして市民に認識される空間を導出する既往研究⁶⁾⁹⁾¹¹⁾¹³⁾²²⁾の結果から、地域アイデンティティとして認識される空間は個人的な偏差が比較的少なく、公共的に認識する空間が多数存在することが確認されていることや全州市の地域アイデンティティ空間を分析した既往研究⁶⁾⁷⁾の結果で、韓屋マウルが全州市の地域アイデンティティ空間の中でその認識率が高く現れる場所であることで、本研究の票数も一定の傾向を把握するうえで有効な回答票数であると考ええる。

4 韓屋マウルに対する認識と反応の現況

4.1 韓屋マウルに対する認識の現況と変化

全州市の場所を選定した結果、回答者 216 名の中で 189 名 (87.5%) が韓屋マウルを「全州市を代表する場所」として認識していることが分かった。1998 年に行われた RYU®の全州市ランドマーク調査と 2008 年に本研究と同じ方法で行われた全州市の都市イメージ要素の調査結果⁷⁾と本研究の結果を比較すると韓屋マウルが全州市の地域アイデンティティとして成長・変化したことが捉えられる。

表 7 全州市の場所の変化

	1988 年 ⁶⁾ * ランドマーク	2008 年 ⁷⁾	割合	2013 年	答数	割合
1	富南間	客舍周辺の市内	57.6	韓屋マウル	189	87.5
2	徳津公園	徳津公園	51.9	徳津公園	75	34.7
3	全州市役所	韓屋マウル	47.5	客舍周辺の市内	44	20.4
4	湖南第一間	W.C 競技場	41.1	全北大学	38	17.6
5	客舍	慶基殿	37.3	殿洞聖堂	28	13.0
6	コアデパート	全北大学	26.6	慶基殿	27	12.5
7	慶基殿	音文化の殿堂	24.1	映画通り	27	12.5

*1998 年は順位のみ

1998 年の調査結果は、本研究の方法と違う認知マップの作成方法で得られた全州市のランドマークで、直接的な比較はできないが、時期的に全州市が歴史的な町並みの再生を行う前に行った調査で、1988 年代にはまだ一般市民に認識されていない状況であったことは比較できる。また、2008 年に本研究と同じ方法で行われた全州市の都市イメージ要素の調査結果では 1988 年と違って全州市の場所として選定されその認識が向上されたことが分かる。さらに 2013 年の調査ではその順位が 1 位になり、韓屋の保全政策が一般市民の地域アイデンティティ認識に肯定的な影響を与えたと考えられ、近代の歴史的な町並みであっても再生によりその認識を向上できる可能性が確認できた。

4.2 韓屋マウルに対する認識可否による反応の相違

1) 反応の現況

韓屋マウルにおける「反応」を 5 点尺度で評価した結果、韓屋マウルへの愛着が 3.66、行動意思が 3.52 を示し、全州市民が韓屋マウルに対してやや肯定的な反応をもつことが分かった。しかし、「発展のために寄付したい」、「周辺に住みたい」の 2 項目の平均が各 3.0、2.9 に現れ、韓屋マウルへの直接的な行動意思は比較的低いことが分かった。

表 8 反応の現況

愛着	評価	行動意思	評価
デザインが好き	3.7	また訪ねたい	4.1
愛着を感じる	3.7	他の人にお勧めしたい	4.2
そのまま保って欲しい	3.6	保全活動に参加したい	3.4
満足感を感じる	3.5	発展のために寄付したい	3.0
魅力的な場所だと思う	3.8	周辺に住みたい	2.9
平均	3.66	平均	3.52

2) 韓屋マウルの認識可否による反応の相違

認識と反応の関係を分析するために、回答者を韓屋マウルを全州市の場所に「選定した回答者」と「選定しなかった回答者」の 2 つのグループに分け、グループごとにアイデンティティや反応の評価点数を比較した。その結果、表 9 のようにすべての項目で韓屋マウルを選定した回答者グループの評価点数が高いことが分かった。また、韓屋マウルの変化による反応の変化も選定した回答者グループが、より肯定的に評価することが分かった。その結果により、認識の強化に影響を与え

る特性を導出して空間計画に適用すれば、その変化により認識が強化するとともにアイデンティティや反応も強化する可能性が確認できた。

表 9 場所選定の可否による「認識－反応」の評価平均比較

区分		選定可否		区分		選定可否	
		○	×			○	×
アイデンティティ	きれいな	3.9	3.3	愛着	デザインが好き	3.8	3.2
	代表する	4.5	4.1		愛着を感じる	3.8	3.4
	歴史的な	4.1	3.6		そのまま保って欲しい	3.7	3.2
	象徴する	4.3	4.1		満足感を感じる	3.6	3.1
	唯一な	3.9	3.6		魅力的な場所だと思う	3.9	3.5
	固有な	4.0	3.6	平均		3.7	3.3
	個性ある	4.0	3.6	行動意思	また訪ねたい	4.1	3.9
	親しい	3.9	3.5		他の人にお勧めしたい	4.2	3.7
	楽しい	3.8	3.3		地域活動に参加したい	3.5	3.2
	活気がある	3.9	3.7		発展のために寄付したい	3.0	2.5
実用的な	3.3	3.0	周辺に住みたい		2.9	2.7	
	便利な	3.1	3.0	平均		3.9	3.5
平均		3.9	3.5				

表 10 場所選定の可否による反応変化の比較

区分	選定可否	
	○	×
変化認識による愛着の増加	3.4	2.7
変化認識による来訪回数の増加	3.3	2.9
平均	3.3	2.8

5 韓屋マウルに対する「認識－反応」過程の変数

韓屋マウルに対する一般市民の「認識－反応」過程の変数を導出するために「韓屋マウルを全州市の場所として選定した回答者 189 名」の回答を用いて因子分析を行った。韓屋マウルの計画要因を導出した結果、メッセージの組み合わせにより「因子 1：空間機能」、「因子 2：文化行事」、「因子 3：街路整備」、「因子 4：伝統的外観」、「因子 5：スカイライン」、「因子 6：設備」の 6 つの因子が導出された (表 11)。

表 11 計画要因の導出

メッセージ		空間機能	文化行事	街路整備	伝統的外観	スカイライン	設備
施	休憩施設	0.703	0.109	0.346	0.111	0.104	0.131
施	記念品販売施設	0.696	0.357	0.143	0.163	0.044	-0.129
施	伝統工芸関連施設	0.691	0.335	0.115	0.176	-0.043	0.010
施	その他の商業施設	0.627	0.131	0.051	-0.149	0.099	0.184
施	飲食店カフェ	0.624	0.080	0.209	0.328	-0.033	0.111
施	娯楽施設	0.538	0.135	0.242	0.108	0.129	0.119
施	宗教施設	0.468	0.415	0.004	0.128	0.014	0.344
施	宿泊施設	0.444	0.294	0.103	0.299	-0.003	0.163
活	伝統的な行事	0.143	0.782	0.186	0.219	0.067	0.062
活	現代的な行事	0.113	0.715	0.346	0.091	0.026	0.073
活	保存活動	0.251	0.676	0.193	0.034	0.132	0.187
活	祭り	0.233	0.639	0.249	0.171	0.084	0.195
施	文化財	0.363	0.595	0.026	0.222	-0.068	0.004
施	文化芸術施設	0.505	0.565	0.213	0.270	-0.038	-0.084
施	観光施設	0.502	0.546	0.024	0.323	-0.009	-0.04
外	象徴物	0.218	0.479	0.421	0.026	0.241	0.233
外	歩行者街路	0.112	0.131	0.828	0.138	0.065	0.036
外	公園、広場	0.289	0.275	0.716	0.176	0.070	-0.100
外	小さい道	0.209	0.285	0.645	0.36	-0.014	0.035
外	街路施設物	0.202	0.121	0.636	0.314	0.099	0.318
外	面白い街路施設物	0.271	0.184	0.586	0.138	0.147	0.406
外	親しい外観	0.100	0.159	0.276	0.803	0.014	0.067
外	伝統的な様式	0.244	0.211	0.176	0.775	-0.027	0.062
外	歴史的建造物	0.326	0.254	0.100	0.693	0.095	0.182
外	整備された外観	-0.05	0.149	0.395	0.617	-0.108	0.170
外	屋根	0.015	0.075	0.151	-0.039	0.915	0.003
外	看板	0.113	-0.088	-0.058	0.088	0.879	-0.078
外	高さ制限	0.034	0.144	0.101	-0.066	0.865	0.066
外	目立たない設備	0.146	0.086	0.108	0.250	-0.074	0.782
外	案内表示版	0.123	0.193	0.523	0.075	0.048	0.576

数値：因子負荷量 因子抽出法：主成分分析、

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法、a. 8 回の反復で回転

表 12 アイデンティティの評価基準導出

	象徴性	独自性	実用性
象徴する	0.748	0.438	-0.052
代表する	0.701	0.424	-0.034
楽しい	0.692	0.187	0.506
活気がある	0.687	0.033	0.492
親しい	0.624	0.186	0.486
唯一な	0.060	0.820	0.220
固有な	0.223	0.796	0.224
歴史的な	0.427	0.678	-0.053
個性ある	0.367	0.554	0.397
きれいな	0.314	0.490	0.369
便利な	0.041	0.143	0.846
実用的な	0.150	0.211	0.834

数値：因子負荷量 因子抽出法：主成分分析、
回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法、a. 10 回の反復で回転

表 13 反応の類型導出

	価値観	行動意思
満足感を感じる	0.802	0.180
魅力的な場所だと思う	0.797	0.373
そのまま保って欲しい	0.727	-0.074
他の人にお勧めしたい	0.725	0.39
愛着を感じる	0.717	0.397
また訪ねたい	0.707	0.432
デザインが好き	0.688	0.336
発展のために寄付したい	0.122	0.857
地域活動に参加したい	0.257	0.840
周辺に住みたい	0.238	0.629

数値：因子負荷量 因子抽出法：主成分分析、
回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法、a. 3 回の反復で回転

韓屋マウルのアイデンティティ評価項目を導出した結果、韓屋マウルは「因子 1：象徴性」、「因子 2：独自性」、「因子 3：実用性」の評価により他の空間と区別されることが分かった(表 12)。韓屋マウルに対する反応を導出した結果、「因子 1：価値観」、「因子 2：行動意思」の 2 の類型に分類された(表 13)。

6 韓屋マウルに対する「認識－反応」に影響を与える計画要因

6.1 韓屋マウルに対する「認識－反応」過程モデル

導出された韓屋マウルに対する各変数を 2 章でまとめた空間に対する一般市民の「認識－反応」過程モデル(図 3)に代入し、韓屋マウルに対する一般市民の「認識－反応」の因果過程を分析するための分析モデルを作成した(図 4)。

図 4 韓屋マウルに対する「認識－反応」過程モデル

6.2 韓屋マウルに対する認識と反応に影響を与える計画要因

1) 韓屋マウルに対する「認識－反応」過程モデルの経路別の適合性

すべての「計画要因」が「認識」と「反応」に影響を与えるわけではないという「認識－反応」過程の特性を考慮し、図 4 の因果過程モデルの各経路の有効性を確認するために経路別の適合度分析を行った。

その結果、表 14 のように「スカイライン⇒価値評価」、「街路整備⇒価値評価」、「設備⇒価値評価」、「実用性⇒反応決定」の 4 つの経路でその有意確率が低く、その因果関係が有効ではないことを分かった。

表 14 韓屋マウルに対する「認識－反応」過程の経路別の適合性

経路	推定値	標準誤差	検定統計量	確率	修正
空間機能 ⇒ 価値評価	0.365	0.072	5.034	***	
文化行事 ⇒ 価値評価	0.120	0.061	1.965	0.049	
伝統的外観 ⇒ 価値評価	0.297	0.063	4.751	***	
スカイライン ⇒ 価値評価	-0.056	0.038	-1.472	0.141	消
街路整備 ⇒ 価値評価	0.037	0.055	0.672	0.501	消
設備 ⇒ 価値評価	0.109	0.072	1.508	0.132	消
価値評価 ⇒ 象徴性	1.000				
価値評価 ⇒ 差別性	1.063	0.172	6.197	***	
価値評価 ⇒ 実用性	0.890	0.147	6.056	***	
象徴性 ⇒ 反応決定	0.392	0.081	4.842	***	
差別性 ⇒ 反応決定	0.271	0.088	3.072	0.002	
実用性 ⇒ 反応決定	0.031	0.048	0.654	0.513	消
反応決定 ⇒ 行動意思	0.904	0.166	5.462	***	
反応決定 ⇒ 価値観	1.000				

(***p<0.001)

そこで図 4 の韓屋マウルに対する「認識－反応」過程のモデルからその 4 つの経路を消し修正したモデル(以下、修正モデル)の適合度分析を再び行った。その結果、修正モデル適合性指数について TLI や CFI^{注 8)} が勧奨指数である 0.9 に近接する 0.819 と 0.831、主要指数である RMSEA^{注 9)} が 0.1 の以下である 0.082 となり採用可能なモデルであることが分かった。また、GFI と AGFI^{注 10)} が各 0.818 と 0.784 で勧奨基準である 0.9 より多少低く現れたが、このモデルは一般化を目指すことを意図しておらず、認識と反応の現況傾向を把握するためには採用可能な数値であると考えられる。

2) 韓屋マウルに対する認識と反応に影響を与える計画要因

修正モデルの因果過程を分析した結果(図 5)、韓屋マウルに対する「認識－反応」に影響を与える計画要因や特性が以下のように確認できた。

図 5 韓屋マウルに対する「認識－反応」過程

- ① 韓屋マウルに対する「認識－反応」過程に影響を与える計画要因は空間機能、伝統的外観、文化行事の 3 つの要因であり、歴史的町並みを地域アイデンティティとして一般市民に認識させ、反応を誘導するためには歴史的町並みの伝統的外観のみではなく空間機能や文化行事に対する政策も有効であることが分かった。
- ② 韓屋マウルは「空間機能、伝統的外観、文化行事」の象徴性、独自性、実用性という 3 つのアイデンティティの評価により他の地域と区分された上で認識されることが分かった。

③しかし、韓屋マウルに対する「認識－反応」に影響を与えるアイデンティティの評価基準は象徴性と独自性の2つに現れたことにより、歴史的な町並みの保全に対する反応を誘導するためには、象徴性と独自性を示すアイデンティティを基準にしてその空間計画を行う必要があると言える。

7 まとめ

本研究は歴史的町並み保全地区に対する一般市民の「認識－反応」過程に着目しその変数や特性を分析することで、歴史的町並み保全地区に対する一般市民の「認識強化の効果」や「認識－反応過程に影響を与える計画要因」を明らかにした。

その結果、「一般市民の認識および反応に対する変化・向上の可能性」や「韓屋マウルに対する一般市民の認識と反応の誘導」に対して以下の可能性や特性を示唆することができた。

1) 一般市民の認識および反応に対する変化・向上の可能性

韓屋マウルが1930年代に形成された歴史的町並みであるが、保全政策が一般市民の地域アイデンティティ認識に肯定的な影響を与えられ、近代の歴史的な町並みであっても再生によりその認識を向上できる可能性が確認できた。また、韓屋マウルを全州市の場所として認識する回答者が韓屋マウルに対するアイデンティティと反応のすべての項目で比較的良好な評価をしている。

これにより、認識と反応に相関関係があると考えられ、認識に影響を与える計画要因を政策に適用すれば、認識が向上するとともに反応も誘導する可能性が確認できた。

2) 韓屋マウルに対する一般市民の認識と反応の誘導

歴史的町並みを地域アイデンティティとして一般市民に認識させるためには歴史的町並みの伝統的外観のみではなく空間機能や文化行事にも政策が必要であることが示された。

また、韓屋マウルに対する「認識－反応」に影響を与えるアイデンティティの評価基準が韓屋マウルのすべてのアイデンティティ特性ではなく、象徴性と独自性の2つに現れたことにより、歴史的な町並みの保全に対する反応を誘導するためには、韓屋マウルにおける「空間機能、伝統的外観、文化行事」の「象徴性と独自性」を基準にして空間計画を行う必要性を示唆した。

今後は、歴史的町並みを保全・活用している日本の事例を対象に一般市民の「認識－反応」過程に関する検討を進めていく。

参考文献

- 1) 福田球己：赤瓦は何を語るのか－沖縄県八重山諸竹富島における町並み保存運動－, 地理学評論, 69号, pp. 727-743, 1996. 09
- 2) 足立裕司：アメリカにおける歴史的建造物の保存と対策, 月刊文化財 390号, pp22-32, 1996. 02
- 3) 大島規江：伝統的な建造物軍保存地区における町並み保存に対する住民意識, 日本建築学会計画系論文集第590号, pp81-85, 2005. 04
- 4) Tabachnick B.G. et al. : Using Multivariate Statistics, Allyn & Bacon, 2006
- 5) 日本建築学会：建築環境心理生理用語集, 彰国社, 2013
- 6) RYU, G.I. : A study on the Cognitive Characteristics of Landmarks in Jeonju, 韓国全北大学修士学位論文, 1988
- 7) 鄭秀卿：都市イメージの認知要因を考慮した都市空間の整備方案に関する研究, 韓国全北大学修士学位論文, 2009
- 8) 韓国全州市：伝統文化特区基本計画および事業計画, 2000
- 9) Boulding, K.E. : The Image, University of Michigan Press, 1956
- 10) Lukermann, F. : Geography As A Formal Intellectual Discipline and The Way In Which It Contributes To Human Knowledge, Canadian Association of

- Geographers, Vol. 8, Issue 4, pp167-172, 1964. 12
- 11) Relph, E. : Place and Placelessness, Pion, 1976
 - 12) 日本建築学会(編)：人間－環境系デザイン, 1997
 - 13) Lynch, K. : Image of The City, MIT Press, 1960
 - 14) Steele, F. : The Sense of Place, CBI Publishing Company, 1981
 - 15) Greene, T.C. : Cognition and the management of place In the Nature and the Human Spirit edited by B. Driver, et al., State College, PA: Venture Publishing, 1996
 - 16) LEE, N.H. et al. : Causality of Placeness Formation by Using Structural Equation Modeling, 大韓国土・都市計画学会学会誌「国土計画」, 第46巻第3号, pp19-36, 2011. 06
 - 17) Wagner, P.L. : Environments and peoples, Prentice-Hall, 1972
 - 18) Lee, S.H. et al. : The Image and Visual Preference for Urban Setting, 韓国造景学会学会誌, 第26巻, 第3号, pp. 134-142, 1998. 10
 - 19) Kim, J.H. : A Study on the Relationship between Influential Range and Cognition Factor of Landmark, 韓国造景学会学会誌, 第30巻, 第4号, pp. 9-18, 2002. 10
 - 20) 韓国全州市：伝統文化区域地区単位計画補完, 2006
 - 21) 韓国全北発展研究院：全州韓屋マウル造成事業の都心再生成果分析および改選方案, 2010
 - 22) IM, S.B. et al. : A Study on the Types of Experiences Related to Sense of Place in Cities, 韓国造景学会学会誌, 第39巻, 第6号, pp. 46-56, 2011. 12
 - 23) IM, H.N. et al. : Effect of Placeness Cognition Characteristics on Behavioral Intentions, 韓国都市設計学会学会誌, 第14巻第2号, pp113-126, 2013. 04
 - 24) KWON, Y.K. et al. : A Study on the Structural Equation Modeling of Insa-dong street's Sense of Place, 大韓国土・都市計画学会学会誌国土計画, 第46巻第2号, pp19-36, 2011. 04
 - 25) Williams, D.R. et al. : Measuring Place Attachment: Some Preliminary Results In J. Gramann, Proceedings of the Third Symposium on Social Science in Resource Management, pp. 700-722, 1990. 05
 - 26) 小塩真司：はじめての共分散構造分析 Amos によるパス解析, 東京図書, 2008

注

- 注1) 本稿は韓国全州韓屋マウルを対象としているが、今後日本の伝統的建造物群保存地区を対象として研究を進展させる予定である。そのため日本と韓国の両国でなされている歴史的町並みを保全する類似の制度を考察し、両国の歴史的町並みとそれを取り巻く周辺環境を示す用語として「歴史的町並み保全地区」を用いた。日本の場合には伝統的建造物群保存地区が、韓国の場合には自治体で指定する地区単位計画レベルの保全計画が該当する。
- 注2) 「Boulding, K.E. (訳) KOO, H.S. : 20世紀の人間と社会のイメージ, 汎潮社, 1988」のp. 16から引用
- 注3) 「Lukermann, F. : Geography As A Formal Intellectual Discipline and The Way In Which It Contributes To Human Knowledge⁽¹⁰⁾」のp. 170から引用
- 注4) 「Relph, E. (訳) KIM, D.H. et al. : Place and Placelessness, Nonhyung, 2005」のp. 129から引用
- 注5) 「Relph, E. (訳) KIM, D.H. et al. : Place and Placelessness, Nonhyung, 2005」のp. 138から引用
- 注6) 「Wagner, P.L. : Environments and peoples⁽¹⁷⁾」のp. 5から引用
- 注7) 「Lynch, K. : Image of The City⁽¹³⁾」のp. 6から引用
- 注8) TLI (Terker and Lewis Index) や CFI (Comparative Fit Index) は分析しているモデルが独立モデルから飽和モデルまでの間にどのあたりに位置するかを表す。1.00に近いほど望ましく、0.90より多きいとよいモデルといわれる。(「はじめての共分散構造分析 Amos によるパス解析」⁽²⁶⁾のp. 110から引用)
- 注9) RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) は小さいほど望ましい一般的には0.05以下であればよい、0.10以上であればよくないとされる。(「はじめての共分散構造分析 Amos によるパス解析」⁽²⁶⁾のp. 110から引用)
- 注10) GFI (Goodness of Fit Index) は飽和モデルにおいて1.00になり GFI や AGFI (Adjusted GFI) は1.00に近い値をとるほど望ましいとされる。一般的に0.90より大きいと、当てはまりのよいモデルとされる。(「はじめての共分散構造分析 Amos によるパス解析」⁽²⁶⁾のp. 111から引用)

(2013年9月10日原稿受理, 2014年3月5日採用決定)